盛田常夫『体制転換の政治経済社会学－中東欧 30 年の社会変動を解明する』

日本評論社、2020 年 3 月刊行

評者：八木紀一郎　　2022 年 9 月 14 日　キャンパスプラザ京都

1．　評者の体制転換研究とのかかわり

1989－90 年における欧州滞在、1990 年代後半から「進化経済学」を志向

体制にかかわる経済進化の歴史的実験としての注目

－「経路依存性」「内生性」（基礎社会）vs　「目標依存性」「外生性」

－「転換」の作動としての「対抗的交換」論「Voice/Exit」論

八木「体制転換と制度の政治経済学」（『ロシア・ユーラシア経済　研究と資料』928 号）

「考察を進めるほど、私にとっても、この移行＝体制転換の歴史的特性の意義が増大し、本論文においても、その結語は理論的成果ではなく、歴史的解釈を求めるものになった。」（p.18）

2．　盛田さんの体制転換研究との出会い

1980 年代のコルナイ訳書、『経済評論』連載⇒『ハンガリー改革史』1991 年の衝撃

『ポスト社会主義の政治経済学』（2010）、最近著

3．　盛田最近著を前著と比較すると

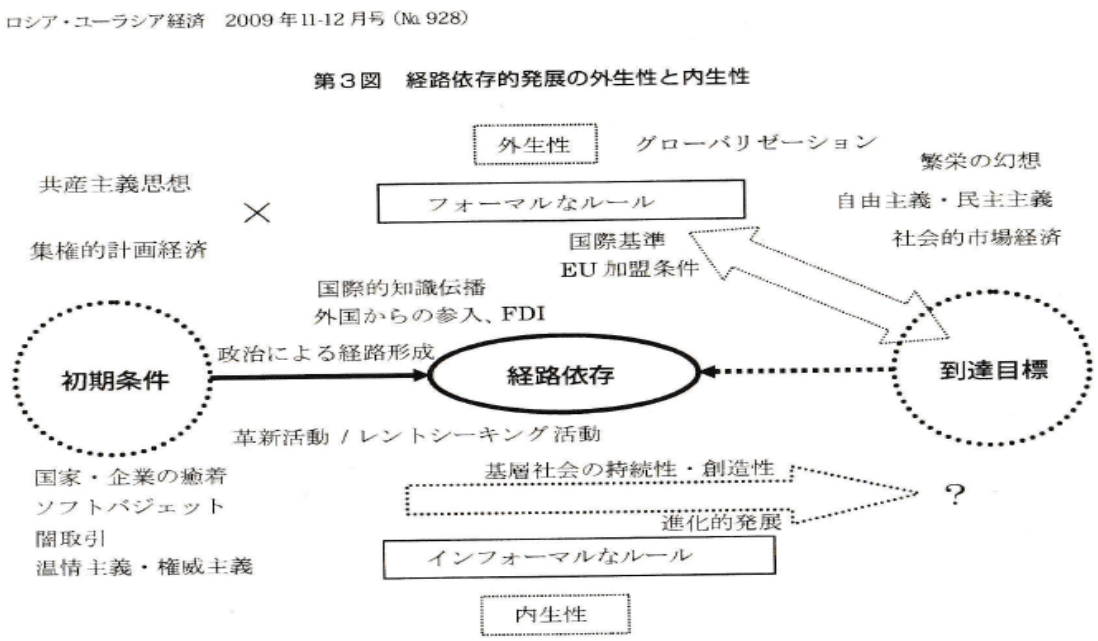
―【前著にあるターム】「国民経済計画の不可能性」、（「国民経済の国家統制による物財配給システム」）「移行」ではなく「転換」、「社会の自死」、「ネクローシス型社会」、「借り物経済」「ゲストワーカー現象」、「オポチュニズム」と「ポピュリズム」

【新著で出現したターム】　「方法論」、「社会学」、「歴史学」

「方法論」（第 1 章）は、日本の社会主義経済論、欧米の移行経済論、コルナイ理論の基本的な視点の批判であるが、ポジティヴな指針が見えない。「社会学」（第 5 章）は、転換後の「不足現象」の背後にある社会学的特徴（行動様式と社会構造）の詳述。「歴史学」（第 8 章）は、第二次大戦後のハンガリー政治体制の成立過程における粛清と 1956 年「動乱」、カーダール体制

についての情報博捜のうえでの記述。

4．　小生の図式における**「経路依存性」と「内生性」/「目標志向性」と「外生性」で整理すればどうなるのだろう？**



ソ連社会主義の「戦争経済」（交換＝市場経済に対立する配分 give but obey）的特質

戦時配分型経済　←→　交換＝市場経済

戦勝国（ソ連）の監視下における連立政権（共産党による内務省・政治警察の掌握）⇨
サラミ戦術による権力掌握　⇨　人民民主主義の政治体制

これらは、もともとは「外生的」な要因であったが、戦後の政治経済体制のもとで「内生」化し、「経路依存性」を持つようになった、ということか？
（第二次世界大戦後の社会主義化のもとで、ハンガリー社会の「内生性」は存在したのか？　農業集団化と商工業の国営化政策の強行とそれをめぐる対立にふれていないので、純粋に政治史的な記述になっている。東欧社会主義の構造的問題についてふれて欲しかった。
戦後「民主化」的な「希望」は存在しなかったのか？　はじめから「ネクローシス」的な社会経済であったのか？）
体制転換後：このような過去の歴史が生み出し、内生化した、社会構造・行動様式、行政と政治の組織・行動様式が「体制転換」後にも持続、あるいは形を変えて再生した。
「外生性」：欧州の市場統合のなかでの「外資」受け入れ⇨周辺進出基地化
「転換」の本質：国家・党資産のエリートによる横領的な再分配
「早熟な福祉国家」＝「国庫」経済による大衆の支持獲得

	内生性	外生性
人民民主主義革命期	？	ソ連の圧力/ソ連型社会主義
東欧社会主義期	内生的発展？/ネクローシス的社会・経済	継続する政治・経済・軍事的統合/経済・財政危機
体制転換期	支配エリートの持続 市場化＝国家資産の再分配	欧米専門家・国際機関・EU のガイド/国際的市場統合
ポスト社会主義期	「不足現象」/配分原理の持続（国庫経済）/権威的ナショナリズム	外資の支配/青年・専門職種の流出/EU の規制

評者による整理：ハンガリー政治社会経済における内生性と外生性

５．全編を貫いているモチーフは、「２０世紀社会主義」とは何だったのかという問いであろう。

５.1. この問いは普遍的であろうか？　それとも、ノスタルジーにすぎないか？

— たとえば、日本の現代史にとっては？　Yes　— ドイツの現代史にとっては？　Yes

— 中国の現代史にとっては？　？　— メキシコの現代史にとっては？　？

市場・交換原理を入れた社会主義（社会民主主義）の存在とその現在における危機という政治状況に対して、盛田体制転換論は何を示唆するのであろうか？

5.2. ２０世紀社会主義批判＝それは「世俗の啓蒙（？）独裁」であった！

（レーニン主義・スターリン主義は啓蒙思想か？　評者には＜反啓蒙＞の「宗教運動」のように思える。）　啓蒙君主制は実際には穴だらけで「全体主義」にはほど遠かったのではないか？

啓蒙思想は「党」を肯定するだろうか？　市民社会を超越した権力の萌芽、権力掌握のための「党」、暴力装置・情報装置を意識的に用いる「党」を？　「啓蒙の党」はフリーメーソン型では？

「２０世紀社会主義」は、経済的には、「戦争経済」＝資源の指令的動員を可能にする配分・配給

経済といっていいだろうが、より根本的には「独裁」の政治思想が問題。

マルクスの市民革命の政治過程分析における権力移行論→これから「階級独裁」のアイデアが摘出され、「党」の政治綱領化された→「階級独裁」＝「党独裁」への転化。つまり、＜国家と市民社会＞というノーマルシーの解体→レーニンのディストピア：過渡期は階級闘争の持続＝「継続革命独裁」（文革）になるが、社会主義化完了後は、「共産主義」を目標にした制度としての「党独裁」に転化する。

5.3. なぜ社会主義は「全体主義」化しやすいのか？

A） 思想的な検討　　個人の上に社会を置くこと自体が問題だが、協働と共生保障をいかにして実現するかという課題が残る。

B） 経済学的な検討　　計画経済の不可能性、マルクス主義のサンシモニズム的特質

C） 政治学的検討　　政治理論の欠陥。階級独裁、階級政党、前衛政党。権力装置を備えた政党。市民社会なき政党。

D） 社会学的検討　　基層社会、活動家のリクルートと行動規範、社会の分断と統合

E） 代替的な「社会主義」理論（思想）はありうるか？

以上